

D. N. マクロスキーのレトリック論の検討*

山本 泰三

本稿では、マクロスキー (D. N. McCloskey) のレトリック論 (McCloskey, 1985; 1996 など) を検討する。マクロスキーの議論は方法論的問題の考察のための一つの視点を提供し、探究されるべき諸問題を示唆した。しかし方法論的問題に対するマクロスキー自身の取り組みは、決して十分なものではなかったように思われる。マクロスキーの問題提起が多様な反応を惹起したことからそれは窺える。本稿では、マクロスキーの主張とそれに関する様々な議論を整理し、レトリック論の意義を評価することを試みる。レトリック論は、一つの症候として捉えることができると思われる。すなわち、経済学方法論の科学論・科学哲学への偏った依存がもたらした帰結の一つとして。

第1節 モダニズムとレトリック

はじめに、レトリック論の概要を述べておこう。マクロスキーは、経済学の公式の方法論を「モダニズム」として特徴付け、その方法論は実際には機能していないと主張する。マクロスキーのいうモダニズムとは、典型的には論理実証主義に代表される、科学哲学に基づいた方法論的立場をさしている¹。それは、科学性の基準は認識論的な基準に従うこととして確立されうとする立場であった。一般的にいえば、実証主義とは、科学的言明の真偽は経験的観測によって検証可能でなければならないとする科学観である。論理実証主義は、観察言明と理論的言明を峻別し、後者を前者によってのみ基礎付け、これらの諸言明を命題間の論理学的関係として構成することを主張する。このような科学観は一切の「形而上学」的な言明を退けることをスローガンとして掲げた。しかしマクロスキーは、科学哲学の成果や文学理論を援用して、モダニズムを批判する。モダニズムは、知識や科学活動についての極めて狭い見解に基づく。もしもモダニズムの基準に科学が厳格に従わなければならないとしたら、研究をすすめることはほとんど不可能になってしまうだろう。しかし、経済学方法論の文献においてはこのモダニズムが規範として述べられてきた。

* 本稿は経済学史学会第69回大会 (大阪産業大学、2005年5月) での報告「D. N. マクロスキーのレトリック論の検討」を加筆修正したものである。コメントをいただいた江頭進 (小樽商科大学)、伊藤誠一郎 (大月短期大学)、塩野谷祐一 (一橋大学)、有江大介 (横浜国立大学) の諸氏、および経済理論史研究会での報告の際にコメントをいただいた方々に深く感謝したい。

¹ マクロスキーの「モダニズム」という語法には、意図的に曖昧さを狙っているかのようと思われる面もある。たとえば、ヴァージニア・ウルフと論理実証主義がひとまとめにされ、ともに「ブルジョワ的ではない」という理由で批判される (McCloskey, 1996)。このような語法が“レトリカル”な効果を上げているのは間違いないが、結果としてマクロスキーの議論には恣意的な部分が多い。煩瑣になるので、マクロスキー自身のレトリックをいちいちとりあげることは控える。

ところが、実際の経済学の研究の現場では非公式の方法が用いられているとマクロスキーはいう。それが「レトリック」である。ここでいうレトリックとは、単なる文章の飾りというよりも広い、「説得の技芸」という意味を持つ。科学とは、機械的な手続きに従った過程ではなく、様々なレトリックが用いられる人間と人間の間のコミュニケーションなのである。ここで、メタファーの重要性が主張される。例えば「生産関数」や「弾力性」といった言葉、また数学的推論もメタフォリカルである。生産関数なるものが文字通り現実に存在すると考えるよりも、思考の手段としてその語は用いられていると理解すべきであり、またその方が有用だとマクロスキーは考える。

マクロスキーは事実上、「モダニズム」と方法論を同一視する。方法論は、科学の境界問題への解答と称して科学活動に規則を課そうとするものとして理解されるが、モダニズムはその最たる例であるからだ。こうしてマクロスキーは以下のように宣言する。「レトリックは新たな方法ではない。それはアンチ-方法論だ」(McCloskey, 1985 邦訳 p. 67)。

ここで確認しておくべき問題が二つある。まず、McCloskey(1985)は、以下の点に注意を促している。「その主題は学問そのものであって、経済ではなく、あるいは経済学理論が経済の記述として適切かどうかということでもなく、あるいは経済におけるエコノミストの役割が主として問題なのでさえない。主題はエコノミストが仲間うちで交わす対話、しかも互いに、投資需要の利子弾力性はゼロであるとか貨幣供給は連邦準備銀行が制御するとかを説得しようとする対話である」(同 p. xiv)。この但し書きは、マクロスキーの議論の射程を最も適切に表現していると考えることができる。もう一点は、少なくとも McCloskey(1985)の時点においては、経済学は「うまくいっている」と考えられている、ということである。これは、多くの方法論者の関心とマクロスキーの議論が齟齬を来す原因の一つとなっているようにみえる。これらの点については後述する。

レトリック論が科学における言語の役割を問題の中心に据えていることは明らかであろう。すなわち、言語的なものはその固有の次元を持つのであって、たとえ科学における理論言語であろうとも、「現実」の純粋な反映ではあり得ない。とりわけレトリック論において特徴的なのは、説得という側面を重視している点である。これはAustin(1975)の語法に従えば、発言の、事実確認の性格とは区別される行為遂行的な[performative]性格に焦点を当てていると言えるだろう。多くの方法論的議論が主として理論と現実の対応関係をめぐって展開していることを鑑みれば、この点は評価されてよいと考えられる²。

また、より実際の観点から言えば、マクロスキーは研究をいかに評価すべきかという問題に関して、明快な回答を示しているとも解釈できる。すなわち、経済学がレトリックであるとするならば、経済学者にはそのレトリックを解説する能力が求められる。高度な数理モデルを典型とする華麗なレトリックに眩惑されることなく、そこで何が述べられようとしているかを

² しかし、マクロスキーの本来の関心はおそらくそのようなものではなかったと思われる。たとえば、レトリック論の問題提起を発展させて脱構築などの議論に接合するというアイデア(Rossetti, 1986)は自然なものと考えられるが、マクロスキーはこのような方向を退ける。彼は、いわゆる「ポストモダニズム」を批判理論として理解することにも異論を唱える。

読み取らなければならない。テクニックの誇示それ自体は評価に値しない。過剰な装飾がそのまま優れたレトリックとみなされるわけではないからである。

マクロスキーは「レトリック論」を主張するにあたって、経済学的な研究の外部の多くの研究を参照する。「レトリック」こそが現実の経済学者の実践なのだと議論する際には、例えば経済学のテキスト (P. サミュエルソン, J. ムース, R. フォーゲルなど) を分析し、それを文学と比較することで、両者が同じテクニックを用いていることを示す。ただし、文学との比較や文学理論の援用が行われる前に、マクロスキーはまず、哲学や科学論の権威を用いることで自己の主張を押し出している。なぜならば経済学方法論は古くから経済学の科学性をいかに確立するかという問題を中心に展開してきたのであり、とくにハチソン以後、論理実証主義以降の科学哲学にはっきりと依拠してきたからである(馬渡, 1990)。マクロスキーのレトリック論の内実はほぼ全面的に、パラダイム論以降の動向、とりわけ P. ファイヤアーベントと R. ローティの議論から引き出されているとみてよい。もちろん、このことはマクロスキー自身がはっきりと表明している。

例えばファイヤアーベントはこう述べる。「全ての方法論は、もっとも自明のものでさえ限界をもっている」(Feyerabend, 1975 邦訳 p. 24)。「固定した方法の、あるいは合理性の固定的理論の観念は、人間とその社会的環境についての、あまりにも素朴な考え方に依存しているということが明らかなのである」(同 p. 17)。有名な「なんでもかまわない anything goes」というテーゼは、科学の活動と発展を十全に説明し定義できる認識論的・方法的基準があり、哲学者がそれを定義できる、という科学哲学のスタンスに対して向けられた、一種のアイロニーとして理解すべきである。「合理主義者から見れば、歴史上の実際の研究から浮かび上がってくる科学の実相とその「再現」は、何らの規則性も、一片の理性なるものも示さないものとなるはずで、そのようなありさまを前にして合理主義者連中はこう言うほかはないだろう。何でもかまわれない」(Feyerabend, 1979 邦訳 p. 82)。マクロスキーは「モダニズム方法論を一貫して適用すれば、おそらく経済学の進歩を停止させてしまったことだろう」と述べるが、この文言はそのままファイヤアーベントが書いたものだといってもおかしくない。「科学を一層「合理的」にかつ一層正確にする試みは、科学を抹殺する」(Feyerabend, 1975 邦訳 p. 240)。

ローティによれば、近代哲学の核たる認識論は、〈自然の鏡〉としての心、という観念にもとづいている。この観念は、「信念獲得の因果的説明と信念の正当化とを混同」(Rorty, 1979 邦訳 p. 279)することによって成立する。近代哲学に取り憑いている、「われわれがすがりつくことのできる「基礎」、踏みはずしてはならない枠組、われわれに強いられた対象、反駁しえない表象を見いだそうとする欲求」(同 p. 367)はしかし、意味の全体論や観察の理論負荷性の議論などによる重大な批判に直面している。ローティはいう。「知識を表象の正確さとみなす必要はない」(同 p. 185)。「言明というものがそれが表現している内的表象の性格によってではなく、むしろ社会によって正当化されるものであるとするならば、特権化された表象を分離しようとする試みはまったく無意味なものになってしまう」(同 p. 190)。〈自然の鏡〉としての心という観念は、端的に退けられることになる。

これらの議論から、認識論的基準にもとづかない、社会的過程としての知識活動を把握する

概念として、マクロスキーは「レトリック」を論じているのである。レトリックという語は、ローティのいう「会話」、あるいはファイヤアーベントのいう「プロパガンダ」などの語と交換可能であろう。この主張は、科学は何ごともなし得ないといったことを意味するのではない。「むしろそれは、哲学は認識や真理に関して常識（生物学や歴史学等々の知識によって補われた常識であるが）が語るより以上のことを語ることはできないであろうという主張なのである」（同 p. 192）。

第2節 レトリック論についての諸議論

マクロスキーの主張は、様々な論者によって議論されることとなった。まず、当然予想されることとして、レトリック論の相対主義的な性格に対する批判があるだろう。実際、多くの論者の主張の背景には、「正しい」レトリックと「偽り」のレトリックはどうやって区別できるのか、という疑念が見え隠れしている。しかし、これは古典ギリシャ以来の「レトリック」という概念にそもそも含まれている問題であった。Reboul (1990)によれば、レトリックとは弁論の技術であるが、それはまた弁論に関する技術の教育、さらには弁論に関する理論でもあった。レトリックを用いるということは、単に主張をもっともらしくするための小手先のテクニックに頼るということではなく、レトリックが適切なものであるかどうかを吟味し評価することでもある。そのことによって、不適切な推論を見つけだすことができるだろう。ゆえに、マクロスキーは単純に相対主義を主張したのではなく、開かれたコミュニケーションによって科学性が達成されると考えているとみなされるべきである。これはマクロスキー自身が述べているように、J. ハーバーマスの議論に通ずるものであろう（この点を特に強調するものとして Boylan & O'Gorman (1995)がある）。ただし、一方でマクロスキーがレトリックの「文学的」性格を強調していることも確かである。

また、マクロスキーは社会的・制度的・歴史的な文脈に十分注意を払っていないという批判がある (Coats, 1989 など)。実際、マクロスキーがこのような問題に積極的に取り組んできたとはいいがたい。ただし、このような問題はレトリックという概念の射程外にあるのではなく、むしろそこから必然的に導き出されると考えることもできる。レトリックという概念は、言語の根本的な社会性を前提しているからである。そこから、科学的言説の歴史的編成といった問題を引き出すことは不可能ではない。この方向性は、科学的知識の社会学 (sociology of scientific knowledge, SSK) に近いものになる。ただし、このような問題にレトリック論の関心が向かうわけではないのだが。マクロスキー自身は、科学者集団のコミュニティを、人文主義というヨーロッパの知的伝統に依拠してイメージしていると考えられる。ヨーロッパ的な人文主義とアメリカ的なプラグマティズムの結合として、マクロスキーの科学像は描かれている。しかしながら、これは多分に理想化されたイメージであり³、レトリック論がなす過大な主張

³ 伊藤(2005)は、草創期の社会科学(政治算術)のレトリックに対する態度が屈折したものであったことを指摘する。ホブスやペティがレトリカルな戦略をとらざるを得なかったのは、むしろ人文主義の伝統、レトリック(修辞学)の伝統を批判するためであった。

の源の一つとなっていると考えられる。このイメージはやがて、現実の市場についてマクロスキーが持つヴィジョンへと繋がってゆくことになる。

開かれたコミュニケーションを意味することが意図されているとはいえ、レトリックという概念は本来的に両義性を孕む。レトリックが固定化してしまえば、それは規則に過ぎなくなる (Barthes, 1970)。経済学がレトリックであると宣言することは、固定化した経済学研究のあり方を正当化する論拠としても機能する。この場合、レトリック論は M. フリードマンの議論の最新版として理解されることになるだろう。

比較的多くの論者が一致して主張しているのは、マクロスキーとフリードマンの方法論の類似性である (Mäki, 1987; Gerrard, 1990; Dow, 2002)。両者の理論についての理解は、道具主義的であるという点で共通する。フリードマンは理論はその予測能力によって評価されるとして、仮定の現実性は無関係であると主張する。マクロスキーは、予測は不可能だと考える点でフリードマンとは反対の立場をとるが、理論はその説得性によって評価されると考えている。ここでも現実性は無関係なものとなる。

予測は不可能であるというマクロスキーの立論は、合理的期待理論のマクロスキー流のある種の応用に基づいているという点に特徴がある。合理的期待理論を乱暴に要約するとすれば、合理的な経済主体は経済政策の効果を見越して行動するので、誘導的な経済政策には意味がない、という主張になるだろう。マクロスキーはこれを、国家に政策を助言する経済学者が市井の人々にくらべて合理性で優っているわけではない、という意味に解する。マクロスキーは、アメリカ人的な質問、すなわち「あなたがそんなに利口ならどうしてお金持ちではないのですか？」を経済学者に差し向ける。もし予測が可能なら巨万の富を得ることができるはずだ、ということになる。

また、ミロウスキーなどは、マクロスキーの議論における撞着を指摘している (Mirowski, 1989)。マクロスキーは、経済学者のふるまいを論じる際には、彼等をコミュニケーションを行い、狭い意味での合理性に縛られない主体として描く。一方でマクロスキーは、オーソドックスな経済理論における人間の合理性に関する極端な仮定に異義を唱えることはないのである。レトリック論の立場からすれば、完全合理性の想定もレトリックの一部なのであって、そのことが学者のあいだで理解されているのならば何の問題もないということになるのであろう。ところがマクロスキーの近年の議論は、ある意味でこの矛盾を解消する方向に進んでいる。McCloskey (1996; 2001)における「ブルジョワの美德」についての議論によれば、市場におけるアクターとしてのブルジョワは、たんに効用を最大化するだけの主体ではない。ブルジョワは貴族や農民とは異なる徳目を持つ。ここでマクロスキーはA. スミス (特に『道徳感情論』) を援用している⁴。とりわけ重要なのは、ブルジョワの徳、その行動の特徴は、説得のためのコミュニケーションにあるとされている点である。ブルジョワは「レトリック」を用いる主体なのである。「市場の知恵は、信頼し、交渉し、対話する生活、つまり知的生活における最高の徳目である」(McCloskey, 1996 邦訳p. 14)。ここに至ってマクロスキーは、自分の政治的立場であ

⁴ 有江(1998)は、マクロスキーのスミス解釈の一面性を指摘している。

る「古典的自由主義」の姿を、現実の市場像へと投影してしまっているといつてよい⁵。

Mäki(1987; 1996)は、实在論の立場からレトリック論を検討している。实在論とレトリック論は方法論的な立場として対極にあるようにみえるが、メキはレトリック論と实在論の「結合」を提案するのである。これは実は決して突飛な主張ではない。前述したように、そもそもレトリック論は「仲間うちの対話」を分析することを意図していたのだから、实在論者のいう「存在論」的問題への関心はそもそもないに等しい。強いレトリック論を退けるならば、实在論とレトリック論は補完的な関係を取結ぶことができるのではないかと考えられるのである。マクロスキーはこの主張にある程度譲歩したように見えるが、結局のところ、实在論の導入に積極的意義を認めることはない('You shouldn't want a realism if you have a rhetoric.' McCloskey, 1998)。

もちろんマクロスキーは、経済学がいかにか「現実」を分析するかという点について考えていなかったわけではない。モダニズムを相対化しながらも、マクロスキーにおいて計量的手法が最も重視されていることは明白であり、その傾向はしだいに強まっているといつてよい(一方で、数理的分析に対する批判は激しさを増している)。しかし当初の立脚点からすれば、数量的な知識といえども特権的ではありえないとするのが一貫した解釈だろう。この論点はレトリック論の文字どおりの臨界点であり、マクロスキーの両義性が最も現れる部分でもある(この点は後述する)。

レトリック論に対する批判を集約するならば、マクロスキーはレトリックを過大評価している、ということになるだろう。レトリック論は経済学の科学性についての神話を打ち壊し、経済学というものの研究における方法論的問題を理解するために取り組むべき課題、とりわけ言語的問題への関心を大きく牽引したと言える。しかしながらその反基礎づけ主義は、モダニズムとは別の形の基礎づけ主義を招きかねない。その結果、Mäkiへの対応に典型的にみられるように、「レトリック」「説得」がすべての問題に対する予め用意された答えになってしまう恐れがある。このことは、マクロスキーのアイデアをより深化させることを妨げているといえる⁶

⁵ マクロスキーの市場についての理解は、「貴族」「農民」「ブルジョワ」「美德」といったメタファーの用いられ方から十分窺い知ることができると思われる。マクロスキーは、「プロレタリア」はもはや現代においては大きな比重を占めないと述べるが、ここで「プロレタリア」とはたんに物的生産の従事者を示している。こうして市場経済は「ブルジョワ」を中心として理解すべきだと主張されるのだが(McCloskey, 2001)、先の意味での「プロレタリア」以外のすべてが「ブルジョワ」であるということになる。その「ブルジョワ」は「レトリック」を用いる主体なのであり、市場とはそのような「対話」の場として提示されるに至る。すなわち、「農民」や「貴族」は当然のこととして(彼らの「徳」は「ブルジョワ」の「美德」、市場のエートスとは異なる)、「プロレタリア」も市場におけるアクターとしてはそもそも重要性が低く、しかもその数は減少する一方なので、マクロスキーにとっては、現代の市場において非対称な社会関係は存在しえないということになるだろう。

⁶ 経済学者が用いるメタファーやその他のレトリックの分析は、経済学者が意識的・無意識的に拠って立つ概念の構成へのアプローチとなりうる。すなわち、説得の「方法」とともに、説得の「内容」が問題となってくる。例えば、合理的期待理論を、その数理的定式化を抜きにして評価するわけにはいかないはずである。マクロスキーが例にあげる世界経済からのアメリカ経済の隔離の問題に関しても、マクロスキーのいう量的「基準」の設定におけるレトリックは、国民経済をどのように理解するかということ、国民経済についての概念をめぐって用いられるだろう。レトリックやメタファーは、ランダムに用いられる場合もあるだろうが、系統的に用いられることが多いと考えられる。生産関数や弾力性といった用語もメタファー

(Rossetti, 1986)。

すなわちレトリック論についての議論は、おおむね、レトリック論のある程度までの正しさを認めるが、その上でその適用範囲を制限する、というパターンに落ち着いているとみることができる。言い換えれば、これらの議論は、マクロスキーの立論に不満を持ちつつも、その中心的な主張は受け入れざるを得ない。この点に関しては本稿も同様の立場である。そこで、レトリック論を“受け入れざるを得ない”ものにしていく理由は何かと考えてみるならば、それは明らかに、レトリック論が科学論・科学哲学の成果に依拠しているからである。

第3節 レトリック論は何を意味するか

3-1 モダニズムからレトリックへ

レトリック論の不十分さにもかかわらずその主要な論点を受け入れざるを得ないということ、そしてその論点とは「方法論は無意味である」というものであるということは、方法論的議論の袋小路を示しているのだろうか。この状況は、20世紀の経済学方法論が論理実証主義以降の科学論・科学哲学へ過剰に傾倒したことの帰結であると考えられる。以下では、マクロスキーの議論（むしろレトリック？）に即して、この点を具体的に示す。

まず、マクロスキーが「公式」の方法論としてのモダニズムを退ける点に関しては、さしあたり妥当な議論であるとみなしてよいだろう。その議論の過程で、「非公式」ではあるが一般的に用いられる方法として、レトリックが取り出されてくる。この段階でのマクロスキーの議論は記述的なものといえる。この段階で得られている知見は、(a)【経済学はレトリックを用いている】という一文にまとめられる。これは、先述したマクロスキーの出発点におけるスタンス、すなわち「その主題は学問そのものであって、経済ではなく、あるいは経済学理論が経済の記述として適切かどうかということでもなく、あるいは経済におけるエコノミストの役割が主として問題なのでさえない。主題はエコノミストが仲間うちで交わす対話、しかも互いに、投資需要の利子弾力性はゼロであるとか貨幣供給は連邦準備銀行が制御するとかを説得しようとする対話である」から導かれる。マクロスキーの分析が示す通り、経済学者が文字通りレトリックを用いていることは明らかであり、またレトリックが「コミュニケーション」を意味する概念として定義される以上、これは自明であると言わなければならない。もちろん、自明であることは無価値であることとは別である。

しかしながらその後レトリックはほとんど規範的といってよい扱いを受けるようになる。「認識論は要点を尽くしていないが、文学的思考は的を得ている」（邦訳 p. 83）。「経済科学はレトリックを用いなければならないし、またそうしなければならないことを意識した方が良いかもしれない」（同 p. 117）。もちろんマクロスキーは規範的方法論こそを批判していたのだから、レトリック論は規範としては主張されない。むしろそれは、経済学をある上位カテゴリーへと還元することを意味する。「経済学とは文芸批評の一事例だと見做し得る」（同 p. 91）。すなわ

として理解するならばなおさらであろう。すなわち、レトリックの問題は理論構成の問題に通じている。とはいえこの方向を押し進めることは、マクロスキーから遠ざかっていくことを意味するだろう。

ちこの段階でのマクロスキーの論点は、(b)【経済学はレトリックである】というものになるだろう。

(a)と(b)は決して同じではない。(a)を受け入れることは(b)を受け入れることを必ずしもふくんでいない。さらに言えば、当然なのだが、(a)と(b)を分離することは「モダニズム」を受け入れることを意味しない。しかしマクロスキーにおいてはこれらが混同されているとってよい。すなわち、(c)【モダニズムを退けることは、(a)=(b)としてのレトリック論を意味する】。

(c)が可能になるのは、科学論・科学哲学にもとづく方法論の議論に極めて大きな権威があたえられている文脈においてである。方法論とは科学の認識論的基準にもとづく定義であるとされ、その考えが広汎に認められている、と仮定しよう（これはマクロスキー以前の経済学方法論の状況の近似として考えられている）。この状況にあつて、その認識論的基準が成り立たないということが“最新”の科学論の知見にもとづいて主張され、その証左として(a)が示される。すると、(a)を科学の定義を代替するものとして、つまり(b)として理解する慣性がはたらいってしまう⁷のである。

(b)は上位カテゴリーへの経済学の還元であると述べた。なぜならば、マクロスキーにしたがえば、そもそも科学というものがレトリックなのであるから。「ある個別科学とは、ある部類の対象、および、それらの対象について対話する仕方……のことである」(同p.142)⁸。これは、科学一般についての観点、言い換えれば科学論・科学哲学の観点にもとづいている。マクロスキーのテキスト分析は、経済学のテキストを等しくレトリックに還元する作業である。そこで、他の諸分野と比較しての経済学的な研究の特性さえ顧みられない。それゆえ、経済学的な研究の内部にひしめく差異や対立に重要性があたえられないのが当然といえよう。例えば学派の違いは、理論や問題の立て方あるいは見解の相違としてではなく、もっぱら方法論へのこだわりとして理解される。方法論のこだわりは無意味であるから、それらの差異は無意味ということになる⁹。

「経済学の諸学派には、それぞれの方法論に対するコミカルな執着がある。例えばマルクス主義の経済学方法論は次のような規則をもっている――

これまでの総ての既存の社会の歴史は階級闘争の歴史である。

⁷ (b)が「経済学はレトリックにほかならない」という形をとった場合、(a)との違いは鮮明になるだろう。レトリック論の要約としては強すぎるということになるかもしれないが、「一にほかならない」という表現をここで用いることは、マクロスキーの論調からすれば、必ずしも不適切とは言えないように思われる。

⁸ もちろん、経済学以外の諸科学においてレトリックが用いられていることはまぎれもない事実であり(Latour, 1986)、これもまたある意味では自明である。すなわち(a')【科学ではレトリックが用いられる】。これが(b')【科学とはレトリックである】と同じでないことは言うまでもない。

⁹ マクロスキーは、大文字の方法論と小文字の方法を区別する。まず、もっとも普遍的な規範として、ハーバーマスのいう対話倫理 *Sprachethik*、すなわちマクロスキーのいうレトリックがある。そしてより日常的な、ここでいう小文字の方法があり、これは細々としたテクニックやそれまつわる注意、基本的知識などが考えられる。その中間に、大文字の方法論が位置する。これが立法者としての認識論と同一視され、排除されるべきものとみなされる(McCloskey, 1985)。

統計を用いよ——これは科学的だから。
偽りの意識に冒された言葉に注意せよ。

新古典派の方法論は、英語圏では支配的なものだが、これはなにかんづく次のように言う——

これまでの総ての既存の社会の歴史は利己的な個人の中の相互作用の歴史である。
統計を用いよ——これは科学的だから。
反証不能ないし観察不能の言葉に注意せよ。

オーストリー学派の方法論は次のように言う——

これまでの総ての既存の社会の歴史は利己的な個人の中の相互作用の歴史である。
統計を万一用いるようなことがあれば、細心に用いよ——これは一過的なフィクションだから。
オーストリー学派の方法論以外の指示に一致しない言葉に注意せよ。」

(邦訳 pp. 31-32)

残るのはレトリックの差異のみである。そしてマクロスキーにとって問題なのはメタレベルに立って経済学をレトリックに還元するという一点だけなのであるから、レトリックの差異にも、ましてやそれがもたらしうる概念的効果¹⁰に関しても、とりたてて積極的な注意が払われるわけではない(レトリックの分類を除けば)。それらは全て、レトリックであるという意味において等価なのである。ここで排除されているのは、理論的差異である¹¹。あるいは、マクロスキーにとっては、実在論のいう「存在論的」な問題が経済学的な研究に何らかの差異をもたらしうるなどということはまったく想像することもできない。

こうして、レトリック論にとっては、経済学の現状に対していえることはほとんど何もない。レトリックの強調は「経済学の実質に何ら革命を必要とするようにはならない」(邦訳p. 237)。マクロスキーはこの判断を、ローティの言葉を借りるならば「哲学は認識や真理に関して常識が語るより以上のことを語ることはできない」という科学論の知見が強めてくれると考えているように思われる。このローティの見解は(d)【経済学は認識論によっては改善されない】とま

¹⁰ マクロスキーは読者の役割を重視する文学理論を退け、作者中心の文学理論を採用する。このことは、レトリックに関して解釈の争いが生じる余地を縮小することにつながるように思われる。

¹¹ この排除は、有無を言わせぬ断定である。「経済学が「あまりに数学的だ」とか「あまりに静態的だ」とか「あまりにブルジョワ的だ」とかいう批判は、極めてしばしば表明されるのだが、それほど説得的ではない。これは、「そうした下らない数学的／静態的／ブルジョワ的な方法論によってはきみは真理を知ることが出来ない」という形になっている。この批判は方法論的な信仰に帰着するのであり、この信仰は彼らの不平の現実的な意味を証示する労をとらないのだ。いったいどんな標準からして、静的なモデルを使っただけで経済を理解「出来ない」というのか？ 批判家は語らない」(McCloskey, 1985 邦訳 p. 237)。批判家は実に多くのことを語ってきたと思われるのだが、ともあれマクロスキーの「説得」に成功するためには、決して「方法論的」な「レトリック」を用いてはならないということがよくわかる。

とめることができる。ところで、経済学の状況についてのマクロスキーの理解は、より踏み込んだものである。とくにMcCloskey (1985)においては、経済学は「成功」した学問である。経済学的な研究において見いだされる対立は、レトリックの差異にすぎない。要約するならば、(e)【経済学は改善される必要がない】ということである。ここでも、(a)と(b)の混同と同じメカニズムがはたらく。(d)と(e)は明らかに異なるのだが、科学論の権威のもとで(d)を示すことが、(e)を含意するかのようになってしまう¹²。

様々な論者によるマクロスキー批判は、(a)と(b)および(d)と(e)の混同に対する反発に根ざしているとみてよい。しかしこの混同は科学論という権威への訴えによって引き起こされているのであり、この方略に関していえば、多くの方法論者もマクロスキーとさほど変わるところがない。

3-2 経済学の成功から経済学の危機へ

McCloskey (1996)における経済学の現状認識は、McCloskey (1985)とは随分異なっているようにみえる。10年の時間が、状況を変えたのだろうか。「今日の経済学は欠陥学問である。方法論が誤っており、そのため間違った成果しかえられていない」(McCloskey, 1996 邦訳 p. 4)。「第二次世界大戦後の経済学の大半は改めて最初からやり直されるべきである。「学問的」発見と称されている経済学の業績の大部分は、これまでとは別の方法論にしたがって、文字通り再作業されるべきである。そうでなければ誰も信用すべきではない」(同 p. 6)。「どうすれば経済学を現実世界へ引き戻せるか」(同 p. 7)。ここで問題が、方法論の「存在」ではなく「誤り」に帰せられていることが目を引く。

とはいえ、マクロスキーは経済学を「批判」しようと思っただけではないこともアピールする。「まず私が経済学は真に社会科学の女王だと考えていることをはっきりと表明しておきたい」(同 p. 8)。「私は経済学にケチをつけようなどとは思っていない。……私は経済学を愛し、その知的な伝統を心から賞賛している」(同. 9)。「私ももし経済学なんてばかげたテーマで、市場や資本主義は悪であり、経済学者たちは愚か者だと考えているとしたら、たとえ叔母であったとしても心配なんかしない」。「大部分の通常科学は重箱の隅をほじくっているにすぎない。そうじゃないとしたら、科学は毎日ニュートンの、アインシュタイン的な飛躍を遂げて進歩しているだろう」(同 p. 10)。

では一体何が問題だというのか。マクロスキーは、1. 有意性検定への依存、2. 黒板経済学、3. 社会工学、を害悪として挙げる。この3つは、McCloskey (1985)での言葉を借りるならば、「小文字の方法」ということになるだろう。これらの指摘は当を得たものといってもよい。しかし、ここでの議論をレトリック論にもとづくものとみなすことは難しい。1. と 2. に関して (3. についてもある程度までは)、それが「レトリック」として成功しているならば、レトリック論の観

¹² ファイヤアーベントやローティが述べていたのは、科学の問題を解決するのは科学自身であるということである。「相対主義」という彼らに対する評価は、多くの場合片手落ちである。ただ、いわゆる相対主義的な立場から保守主義への移行というよく見られる傾向については、別途検討を要すると思われる。

点から何を言うことができるのだろうか。それぞれのレトリックについての趣味判断ぐらいのものであろう。3. に関しては、やはりここでも合理的選択理論のマクロスキー流の通俗化ヴァージョンが重要な論拠となっている。しかし、「黒板経済学」と合理的選択理論が区別されるのはいかにしてなのか。ましてや、マクロスキーはこれら3つの研究スタイルの始祖たちを極めて高く評価するというのだから。

科学論への偏った依拠の結果は、科学論の知見の完全な忘却である。McCloskey (1996)において目につくのは定量的な実証研究の推奨であるが、その論調は非常に素朴なものといえる。すでにMcCloskey (1985)においてもこの点は問題含みではあったが、McCloskey (1996)におけるこの主張は明らかに、「レトリック論」の背景となっていたはずの科学論・科学哲学からの批判を免れえないのである。Feyerabend (1975)や Rorty (1979)における議論が、観察の理論負荷性や意味の全体論、すなわち理論から中立なデータの存在を単純には前提できないという知見に依拠していたことが想起されなければならない¹³。マクロスキーが議論しようとする「方法論」は、レトリック論のインパクトと比較しても、はっきりと後退してしまっている。

経済学の状況を改善するための提案は、レトリック論に依拠しては不可能である。そしておそらく、「方法論」を破壊したがゆえに、マクロスキーは、かつて自分が依拠した議論を考慮に入れることもできず、自己の議論の方法論的前提を問うこともできない¹⁴。これは、マクロスキーが経済学方法論の文脈のなかで、方法論的な問題をモダニズムと同一視したこと、およびその前提として、方法論的問題を科学論・科学哲学のレベルでのみ問題にしたことの帰結である。

おわりに

レトリック論は、ある意味では至極まっとうな主張である。学問とはある種のレトリックなのだから、わたしたちはそれを読み取らなければならない。つまり、それをレトリックとして認識できていなければ、レトリックの見かけ自体を崇めることになってしまう。レトリックに習熟するとは、要するに何が語られているかを判別できるということも意味するのだ。

またレトリック論は、それまでの経済学方法論が見ていなかった言語論的問題を提起したといえる。しかし、マクロスキーはその問題を追及することはしなかった。マクロスキーにとって方法論とは認識論的基準の問題としてしかありえず（ゆえにそれはただ消え去るべきものとなる）、研究に内在する問題として方法論的な問題を考えることができなかった。これに対して、

¹³ この点の軽視は、McCloskey (1985)から引き続けているといえるのだが、このことと理論的差異の軽視は同じコインの両面であるかもしれない。たとえば、マクロスキーは、彼の方法論的保守主義にふさわしく、パラダイム転換のような問題にはまったく関心を示していない。

念のために、本稿は定量的な実証研究の意義を否定するものではなく、むしろそれは大きな価値を持つと認識しているということをここで確認しておきたい。ここで指摘しているのはあくまでも、定量的な実証研究についてのマクロスキーの理解の問題である。

¹⁴ 批判的実在論の観点から McCloskey (1996)の主張をみるならば、それが演繹主義以外の何ものでもないことはあまりに明白である。批判的実在論については、Lawson (1997)、西部 (1996)、山本 (2004; 2009)を参照。

方法論研究における实在論は、まさにこのような探究の袋小路を回避するものでなければならない。マクロスキーのいうように、方法の外在的・一般的な指示がよりよい研究を導くと考えることは多くの場合むずかしいだろう。それがうまくいくかどうかは時と場合によるというしかない。

マクロスキーは「ある個別科学とは、ある部類の対象、および、それらの対象について対話する仕方のことである」と述べた。問題にすべきなのは、対話の「仕方」だけではない。対象について、どのようなことを語るのかということは重大な問題である。实在論においては、「存在論」とは、研究の対象がいかなるものであるかを問うことを意味する。最終的にこの問題が「説得」の可否で決着するのだということを認めたとしても、語られる内容の差異は、たんにレトリックの差異にとどまらない。それは現実に異なった帰結をもたらしうるのであるから。

文献

- 有江大介 (1998) 書評 Deidre N. McCloskey, *The Vice of Economist: The Virtue of the Bourgeoisie*. Amsterdam University Press, 1996, 135p. 経済学史学会年報, 第36号
- Austin, J. L. (1975) *How to Do Things with Words*. Harvard University Press. (坂本百大訳『言語と行為』大修館書店、1978)
- Barthes, R. (1970) L'ancienne rhétorique: Aide-mémoire, *Communication*, 16. (沢崎浩平訳『旧修辞学』みすず書房, 1979)
- Boylan, T. A. and O'Gorman, P. F. (1995) *Beyond Rhetoric and Realism in Economics*. Routledge.
- Caldwell, B. J. (1982) *Beyond positivism*. Allen & Unwin. (堀田・渡部監訳『実証主義を超えて』中央経済社, 1989)
- Chalmers, A. F. (1978) *What is this thing called Science?* Open University Press. (高田紀代志・佐野正博訳『科学論の展開』恒星社厚生閣, 1985)
- Coats, A. W. (1989) Economic rhetoric: the social and historical context, in A. Klammer, D. McCloskey and R. Solow (eds.), *The Consequences of Economic Rhetoric*. Cambridge University Press.
- Dow, S. (2002) *Economic Methodology: An Inquiry*. Oxford University Press.
- Feyerabend, P. K. (1975) *Against Method: Outline of an Anarchistic Theory of Knowledge*. New Left Books. (村上陽一郎・渡辺博訳『方法への挑戦』新曜社, 1981)
- Feyerabend, P. K. (1979) *Erkenntnis für freie Menschen*. Suhrkamp. (村上陽一郎・村上公子訳『自由人のための知』新曜社, 1982)
- Friedman, M. (1953) The Methodology of Positive Economics, in *Positive Economics*, University of Chicago Press. (佐藤隆三・長谷川啓之訳『実証的経済学の方法と展開』富士書房, 1977)
- Gerrard, B. (1990) On matters methodological in economics, *Journal of Economic Surveys*, vol. 4, no. 2.
- 伊藤誠一郎 (2005) レトリックを超えて: 修辞学と政治算術 経済学史学会第69回大会報告集
- Klammer, A. (1984) Levels of discourse in new classical economics, *History of Political Economy*, vol. 16, no. 2.
- Klammer, A., McCloskey, D. and Solow, R. (eds.) (1989) *The Consequences of Economic Rhetoric*. Cambridge University Press.

- Latour, B. (1986) *Science in Action*. Open University Press. (川崎勝・高田紀代志訳『科学が作られているとき』産業図書, 1999)
- Lawson, T. (1997) *Economics and Reality*. Routledge. (八木紀一郎監訳、江頭進・葛城政明訳『経済学と実在』日本評論社, 2003)
- 馬渡尚憲 (1990) 『経済学の方法ロジー』 日本評論社
- Mäki, U. (1987) How to combine rhetoric and realism in the methodology of economics, *Economics and Philosophy*, no. 4.
- Mäki, U. (1993) Two philosophies of the rhetoric of economics, in W. Henderson, T. Dudley-Evans, and R. Backhouse (ed), *Economics and Language*. Routledge.
- McCloskey, D. (1985) *The Rhetoric of Economics*. Wisconsin University Press. (長尾史郎訳『レトリカル・エコノミクス』ハーベスト社, 1992)
- McCloskey, D. N. (1994) *Knowledge and Persuasion in Economics*. Cambridge University Press.
- McCloskey, D. N. (1996) *The Vices of Economists - The Virtues of Bourgeoisie*. Amsterdam University Press. (赤羽隆夫訳『ノーベル賞経済学者の大罪』筑摩書房, 2002)
- McCloskey, D. N. (1999) *Crossing: A Memoir*. The University of Chicago Press. (野中邦子訳『性転換』文藝春秋, 2001)
- McCloskey, D. N. (2001) *Measurement and Meaning in Economics*. edited and introduced by S. T. Ziliak. Edward Elgar.
- McCloskey, D. N. (2001) The genealogy of postmodernism: An economist's guide, in S. Cullenberg, J. Amariglio and D. F. Ruccio(ed), *Postmodernism, Economics and Knowledge*. Routledge.
- McCloskey, D. N. (2002) You shouldn't want a realism if you have a rhetoric, in U. Maki (ed) *Facts and Fiction in Economics*. Cambridge University Press.
- Mirowski, P. (1989) Shall I compare thee to a Minkowski-Ricardo-Leontief-Metzler matrix of the Mosak-Hicks type? Or, rhetoric, mathematics, and the nature of neoclassical economic theory, in A. Klammer, D. McCloskey and R. Solow(eds.), *The Consequences of Economic Rhetoric*. Cambridge University Press.
- 西部忠 (1996) レトリックとリアリズム 批評空間、第II期第10号
- Rorty, R. (1979) *Philosophy and the Mirror of Nature*. Princeton University Press. (野家啓一監訳『哲学と自然の鏡』産業図書, 1993)
- Rorty, R. (1989) *Contingency, Irony, and Solidarity*. Cambridge University Press. (齋藤・山岡・大川訳『偶然性・アイロニー・連帯』岩波書店, 2000)
- Rossetti, J. (1996) Deconstruction, rhetoric, and economics, in N. de Marchi (ed) *Post-Popperian Methodology of Economics*. Kluwer Academic Publishers.
- 山本泰三 (2004) 科学論の変遷と問題としての実在論 経済論叢, 第173巻第3号
- 山本泰三 (2009) 実在論と抽象: T. ローソンの批判的実在論の検討 愛知大学経済論集、第179号